

まとめ

宮下英雄



ただいまの汐見先生のお話を伺っておりますと、私は先日の秋葉原の事件と、中学生によるバスジャックの事件を思い出し、若者の心の成長について考えさせられました。皆様もあの事件のことを思い起こされた方もいらっしゃるのではないかと思います。

さて、本日は講演が3つございました。そして、口頭研究発表が4本あり、パネル発表が5本ありました。合計で11本のご発表をいただきました。そして今回のメインテーマは言葉と体験ということですが、本日皆様のご発表を伺いながら、この研究会では、これからどのようなことを進めていかなければいけないのかを考えておりました。

まず一つ感じたことは、鳩貝先生のお話にもありましたが、私たちはこの研究会が、教育の流れの中にあるということ常を呼んでいかなければいけないのではないかと思います。鳩貝先生の発表題は、教育課程と生命尊重の指導ということで、まさしく時期を得た題目ではないかと思います。今回の学習指導要領の改訂にちょっと触れますと、教育基本法改正後初めての学習指導要領ですので、これを全面で受けなければならないということ。また、国内外の調査結果についてのお話がありました。そして、もう一つは、各審議会での情報を即刻入手できたのではないかと思います。といいますのは、日本の場合、学習指導要領が約10年ごとに改正されています。10年前の改正の時は、審議会からの情報があまり入ってきませんでした。なぜ今回このよう

な情報が入手できたのかということ、コンピュータ、インターネットの普及です。ということで、今回の学習指導要領の改訂では、重点がいろいろありました。5番目のところに書いてありますが、その中で、私たちが今回取り上げたのは、言葉と体験です。このことを取り上げて、まずは、新しい教育の中に、私たちの研究も少しずつではありますが、教育の流れの中に同調してきているのではないかと思います。お話や発表をいただいた皆様も、そのようなことを考えておられたのではないかと思います。やはり、これからの研究会の方向としては、風を読むことが必要ではないかと思いました。

二つめとして、動物飼育も教育活動でありますので、教育活動に位置づけた飼育活動をしていかなければいけません。そして、教育活動のデザインが見えてこなければいけないのだらうと思えます。その中には、方向性、目的、主張、哲学等々がその中に内在し、また、学年における発達段階、各教科の目標にしたがった教育がなされなければなりません。言葉を換えれば、マイノリティ、方法等すべてがその中に含まれているのではないかと思います。そのことが、教育活動のデザインということによって表出されるのではないかと思います。もう一つは、確かな学力の育成について、私たちは常に問われているのではないかと思います。そういった場合、基礎基本として、思考力、判断力、表現力、それから、学び方、学ぶ意欲、知識・技能等々が問われてくるのではないかと思います。ということになりますと、意図的、計画的な飼育を私たちは常に考えていかなければならないと思えます。

三点目として、学校・園、行政機関、獣医師の皆様方が、ここに一同に集まってこられております。学校・園では、学習指導要領に則って教育課程を編成し、届け出ることが義務になっております。その中に、獣医師との連携も加えていかなければいけないのだらうと思えます。実施、運用、成果そのすべてを報告することが、学校・園にとって必要なのではないかと思います。獣医師会におかれましては、積極的

な連携を学校・園と図っていただきたいと思ひますし、成果、課題をもっともって報告していただき、学校・園と獣医師会の連携がスムーズに進むようにしていただくことも必要かと思ひます。行政機関におかれましては、そのような連携のシステムが運用されている学校をできる限り訪問していただき、各学校に対してご指導いただきたいと思ひます。

これらのことを総合的に考えますと、学校での動物飼育についての連携においては、一つ一つの積み重ねが必要なのではないかと思ひます。一つ一つの積み重ねの上にやがて花が咲いて、実が実るのではないかと思ひます。

今日のお話の中には、先生たちだけで無理をしてはいけないということがありました。また、子どもたちが先生方を動かしていく。飼育嫌いな先生が飼育が好きになるように子どもたちが動かしていったという事例もありました。先生性や保護者は、獣医師との連携があることで安心感を抱くというお話もありました。やはり、そのような一つ一つの積み重ねが、大切なのではないかと思ひました。

もう一つ、このような活動を行うということは、豊かな学びを子どもたちに経験させていくことではないかと思ひます。豊かな学びとは、学びの豊かさと、もう一つは学びの確かさだと思ひます。そして、この両面を常に考えていかなければならないと思ひます。学びの豊かさは、主体性、他者との関わり、学びを活かすことです。学びの確かさは、飼育活動を通して、基礎基本を習得させることです。そして、学びの豊かさと確かさのバランスをこれから考えていく必要があるのではないかと思ひます。

また、会場からはたいへん貴重なご意見をいただきました。このことに関し、厚く感謝の意を表しまして、まとめとさせていただきます。

15時30分現在、この会場にお集まりの皆様は、教育関係者69名、獣医師の先生方157名、合計で226名という数の報告がありました。このようにたくさんお集まりいただき心より感謝申し上げます。

(聖徳大学人文学部児童学科教授)

